



信州大学医学部附属病院 脳神経内科 池田 淳司

脳神経内科は脳や脊髄、神経、筋肉の病気を内科的に診療する科です。当院の脳神経内科外来では、パーキンソン病などの神経変性疾患、認知症、てんかんなどの患者さんを中心に診療を行っています。今回は『脳神経内科疾患の昨今～未来の治療等』というテーマをいただきましたので、その中でもパーキンソン病の治療についてご紹介させていただきます。

パーキンソン病の患者さんは、発症年齢は60歳前後が多く、日本では1000人に1人くらいの割合で、やや女性に多いと言われていています。遺伝性は5%程度で、残りの95%近い患者さんは原因がわかりません。何らかの原因でドパミンという神経伝達物質を作る神経細胞の数が減ります。ドパミンが体内から減ることによって体の機能が低下し、手がふるえる、動作がゆっくりとなる、転び易い、体が固くなる、などの症状を認めます。基本的にはドパミンの働きを様々な形で補う内服治療が主体です。しかし、パーキンソン病の治療において、良い薬を最初からたくさん使うと、次第に薬の効果が弱くなり、いつの日か全く薬が効かなくなってしまうと言われていています。そのため、パーキンソン病は、患者さんの年齢や症状に応じた治療薬の選択が、必要になります。



平成の時代になり、内服治療も発展して、良い薬がたくさん出ています。ドパミンを補充する内服薬が最も効果を認めますが、体内からドパミンの放出を刺激する薬や、ドパミンの分解を抑える薬など、治療薬の種類が増えています。症状の改善をするだけでなく、神経細胞を保護し、細胞の傷害を抑える薬もあります。また、同じ作用機序の薬でも、1日1回と服薬回数が少ない薬や、効果が持続しやすい貼り薬も出てきました。



上記のような治療をしても、内服薬の効き具合にばらつきを認め、症状に変動が目立つ患者さんがいます。そのような患者さんには、内視鏡で胃瘻を造って小腸(空腸)までチューブを入れて、直接、治療薬を持続的に体外のポンプから注入する治療も、最近注目されています。未来の治療としては、皆さんも注目している iPS 細胞を使った治療が実現化する日が来る可能性もあります。

当院の脳神経内科外来では、脳神経内科疾患に関して患者さんの状態や必要性に合わせて、現在主流の治療から最新の治療まで、提供できるように診療を行っています。



池田淳司医師 脳神経内科外来 水曜日：午前・午後